# 異世界に降り立つ最強の男

リュウガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界に降り立つ最強の男

【Ｎコード】
Ｎ４６２３Ｉ

【作者名】
リュウガ

【あらすじ】
昔・・・・
たった一人で戦い抜いた一人の戦士が居た。
戦士は戦いながらも新たなる力に目覚め、さらに厳しい戦いに身を投じた・・・
しかし、彼に待ち受けていたのは新たなる世界の危機だった・・・

## 登場人物紹介

この物語は・・・・異世界に降り立った一人の仮面ライダーのお話・・・

あまり期待しないでくださいね！

下は、主人公の紹介です

天道一矢（テンドウカズヤ）　男
１７歳

子供の頃、両親を殺され、祖母に引き取られ育った青年
祖母から譲り受けた石のベルトを保管していた所、謎の怪人（グロンギ）に襲われ、ベルトを身に着けると仮面ライダークウガへと変身。

船を警護する為に乗り込んだ「あかつき号」でアンノウンと対峙。
その時に、アギトに覚醒してしまった。

基本的にお人よしで困っている人は絶対に放置できない男。
本人曰く「俺は天の道を往き、一筋の矢を射る者。」だそうだ。

近接先頭において最強。
魔法等は使えないが圧倒的な力の差を見せ付ける。

グロンギ最強の「ン・ダグバ・ゼバ」を倒し、グロンギのゲゲルを終了させた
そして、アンノウン最強の男を倒し、平和な日常を送っていたが

異世界に送られ、新たな世界の危機に立ち向かう

## 第一話　目覚めよ、その魂！

それは・・・突然の出来事だった・・・

『目覚めよ・・・・クウガとアギトの力を持つ戦士よ・・・・』

「・・・・うぅ・・・・？」

俺は天道一矢（テンドウカズヤ）・・・

天の道を往き、一筋の矢を射る者だ。

さっきまで眠っていたはずなんだが・・・・

あれ！？ここどこ！？

なんだこの真っ白な空間は！？

俺の部屋は！？家は！？

リ○！！カ○リ！！！

『・・・なんでネタを引っ張ってるのじゃおぬしは・・・』

うっせぇよ！！

ん？待てよ・・・・

「おいコラ！！！なんで俺の心を中を読めるんだよ！？ふざけんな！！プライバシーの侵害だ！個人情報保護法舐めんじゃねぇぞ、声からして白ひげの生えた変態爺！！！」

『誰が変態爺じゃ！！！わしは小さく、純粋な女の子をただただ空の上から眺めるか弱き爺さんじゃ！！！』

「どーせ、風呂入ってるトコだろうが！！！」

『Σ！？何故バレた！？』

「お前！！！自分で墓穴掘ってどーするよ！！！」

なんやかんやで変な白ひげを生やした爺さんが現れた。
まったく。なんなんだこの爺は・・・

『うおっほん！！さて、本題に戻ろうか。』

「なんだよ・・・」

『実はお前の世界とはまた別の世界で異変が起きているのだ・・・』

白ひげ爺さん（俺命名）はいきなり深刻な話をしてきやがった！

『それでじゃ、最強の力を持つおぬしをその世界に送り込んで助けてもらおうと思う。』

「・・・・もし、その世界が破壊されたらどうなる？」

『お前の世界と共に消滅する。分かったかの？』

爺さんめ・・・
俺をなんでも屋だと思ってるのかコンチクショウ・・・

「・・・俺がその世界に行ったらどうなる？」

『二度とこっちの世界に戻ってこれなくなる。』

「ならいいや。とっとと向かわせてくれ。」

俺は普通に爆弾発言をしてやった。

すると、爺さんは目を瞑りうんうんと頭を下げた

『頼む・・・この通り・・・って、はぁあああああああ！？！？！？』

「うるさい。近所迷惑だ。」

『いやいやいや、普通ないって！？普通ないじゃろ！？』

あぁもう、つくづくうるさい爺さんだ・・・

老人はちゃんとした生活をするべきだ。

俺のおばあちゃんの様に、子供達に夢を与えるのが一番だ。うん。

「うるさい。送るんだったら、さっさと送ってくれ。あっ、一様敵の情報とか教えてくれな。」

『なんと言う男じゃ・・・普通にあんな爆弾発言するものか・・・？』

「・・・無視するなら帰るぞ？」

『嘘じゃ嘘！！！敵は魔物じゃ！！！魔界から人を襲いにやってくる魔物じゃ！！！』

「・・・大体分かった。簡単に言えば、魔王を倒せばいいんだろ？」

あぁ、面倒だ。

送るんだったらさっさとしてくれ・・・・

『そ、それじゃ、送るぞ。しかし、この世界に未練はないのか？』

「生憎、俺はこの世界でやるべき事は全て終わった。確かに平和に過ごすのも悪くはないが、そっちの世界が壊れれば平和もなにもないからな。」

俺はきっぱりと言い放った

そして、この爺さんは少し笑いながら答えた

『それでは・・・・頼んだぞ。』

「・・・・頼まれた。あっ、できれば、トルネイダーとゴウラムも送ってくれ。」

『承知した・・・・それじゃ、未来の為に・・・・頑張ってくれよ・・・・』

そういうと、俺の視界からあの爺さんは消え、不思議な球体が現れたその球体からは不思議な光景が映し出されており、鎧を身に着けた騎士達が必死に魔物と思われる怪人と戦っていた。

「っしゃあ！行くとしますか。」

球体に触ると、球体は謎の扉に変化し、俺を誘ってくれた・・・

## 第二話　異世界

そこには沢山の鎧を身にまとった騎士達が城に侵入した魔物達と戦っていた
その中で、魔物数十体に囲まれた金髪の女性が魔物達を切り裂きながら進んでいた

すると、女性の凛とした声で騎士達に命令した。

「いいか！！！門からけして出すな！！被害を最小限に減らすのだ！！！」

「ティーンズ騎士隊長！！レイナ姫が！！！」

ティーンズと呼ばれる女性は「くっ」と言い放ち
騎士達に言った

「私はレイナ様の所へ行く！！！持ちこたえるのだ！！！」

そう言い放つと、ティーンズは去っていった
騎士達は必死になって魔物と戦うが、体格の差がありすぎる・・・
そして、一人の騎士が吹き飛ばされ、止めを刺そうとしている魔物を見て命の最後を覚悟した時だった・・・

バキィッ！！！！

魔物の顔面は何者かによって蹴られ、他の魔物を巻き込みながら吹き飛んだ
そこには、兵士でもなければ、騎士でもない。

見た事のない黒い服を身に纏った男だった・・・

「へぇ・・・こいつ等が魔物・・・か。」

すると、怒りを露にした魔物がこちらへ走ってきた。
見た目はＲＰＧで良く見る巨人（トロール）と言った所だろうか？

しかし、青年に殴りかかったトロールは青年が居ない事に気づいた
気づけば青年は自分の目の前に立っており、またトロールの顔面に
蹴りを放った
すると、トロールは爆発を起こし、全てのトロールを巻き込み消え
去った

「た、助かった！！！お前は・・・傭兵か？」

「さぁな。気が付いたらここに居た。」

「もうなんだっていい！！！とりあえず、レイナ姫様が危ない！！
！」

そういうと、兵士は青年の手を掴み、そのままレイナ姫と呼ばれる
姫の居る玉座目指して走り出した

「・・・・（ふぅ。こんな時は流れのままにってな。）」

一矢はそう考えながらも兵士に連れられ、走り出した

玉座の間では魔物と戦っている王、そして、王女、さらに王子まで居る。
その中にさっきの騎士ティーンズも加わり、魔物の応戦をした。
しかし、明らかに数が多すぎる。
おまけに中級の魔物が多い、中には上級の魔物も居る・・・

「くそっ！！！」

何回も攻撃しているが、中々数が減らない。
レイナ姫も必死に魔法で応戦している

「ファイアボール！！！」

下級の魔法でも魔物には効果がある。
しかし、数は減らない・・・
むしろ増えている・・・・
そんな時だった、ティーンズの剣が吹き飛ばされた

「しまった！？――――ぐううッ！！？」

すると、トロールはティーンズを掴み、握りつぶそうとした
レイナ姫や、王子、王は手一杯で必死にティーンズを助けようとするが、魔物が邪魔をし、中々うまくいかない・・・

トロールの力がさらに強くなった
このままだったら内臓が破裂する・・・
そんな時だった・・・
刹那、トロールが何者かによって蹴り飛ばされた・・・
その時に、ティーンズは解放され、ゆっくりと落下している・・・・
ぽすっと誰かがティーンズをお姫様抱っこで受け止めた・・・
その男は、長い黒髪に決意を宿した赤い目をした男だった・・・・
ティーンズは何が起きたか分からなかった。
ただ、分かるのは・・・・

「敵・・・？」

「・・・違う。最強の助っ人さ。」

そういうと、ゆっくりとティーンズを下へ降ろした・・・
そして、魔物達を見た・・・

「弱そうなのがうじゃうじゃと・・・」

そう言い、何処からかベルトが現れ、左手をベルトを沿う様に滑らせ、右腕を左から右へ持っていき・・・

「変身！！！！！」

そう叫ぶと、右手で左手を押し、ベルトのスイッチを入れた・・・
その姿は炎の様な真っ赤な鎧を身に纏った戦士だった・・・

## 第三話　炎の戦士、ここに推参！

ティーンズは驚いていた。

自分は上流貴族の騎士としての腕を買われ
この城を守り、レイナと共に過ごしていた。
しかし、数年前からの魔物襲撃事件において、魔物は世界を壊し、
世界の秩序を乱す。
それを知り、ティーンズは騎士としての自分を磨いた。

しかし、自分が危機の時に駆けつけてくれる英雄（ヒーロー）に憧れていた。
自分だって女だ。人並みの幸せを持つ事は許される筈だ。
しかし、最低限認めた相手がいい。
女の我欲の為の道具としか思わない男は圏外だ。
できれば、頭も良く、いつでも自分を守ってくれる男が良かった・・・

だが、この男は・・・・

たった数秒で私の心を奪った・・・・・
長い黒髪は揺れ、決意を宿した瞳はティーンズを見ていた。
綺麗だ・・・いや、言葉にできない・・・
胸が高鳴るのが分かった。
少しずつ顔が熱くなっていく・・・
その前に、ティーンズを降ろし、彼女を守ろうとする大きな背中に
は何か罪の様な物を感じた・・・
そして、彼は炎を模した戦士へと変身した。

「炎の力・・・拳に乗せて・・・・・！」

右手を握り、そしてゆっくりと胸に持っていき、カズヤは言った。
これはクウガ・マイティフォームの時の決め台詞だ・・・
昔から何かある度に決め台詞をつけていたカズヤはマイティフォームの決め台詞を言い放ち、魔物達の大群に向かい走り出した

メキィッ・・・
殴ったモンスターは脆く、簡単に爆発し、消えた。

（なんだ。思ったより弱いのばっかだな。これなら一分で終わるぜ。）

素早い動きに、魔物よりも遥かに強い力・・・
手からの炎の如きパンチは魔物を全て爆発させていった
助走をつけた蹴りは凄まじく、一撃で１０体のモンスターを爆発させた。

そして、一分後
魔物達は恐れをなして逃げ出そうとしたが、クウガのスピードに追い抜かされ、最後の一体も爆発し、消え去った・・・・

「なんだ、手ごたえのない。」

ゆっくりと変身を解除し、言った
周りの者達はただ呆然とカズヤを見ていた
すると、カズヤはこの場を去ろうとした瞬間だった

「ま、待て！！！」

後ろから金髪美人の女性に呼び止められた
すると、女性はカズヤに近寄った

「お前！一体どこの隊所属だ！？」

「いや、どこって言われても・・・クウガ。」

意味の分からない返事をしてしまったが気にしない。
すると、ドレスを着た美女（胸デカいな・・・）が金髪美女の隣に立ち言った

「あ、あの！お名前は？」

「俺？俺は・・・・・」

ゆっくりと右手の人差し指を突き立て、太陽の光の挿すガラスへと向け、言った

「天の道を往き、一筋の弓を射る者。名は天道一矢。」

「テンドウさんですね。助けていただきありがとうございました。我が国を代表して、お礼を・・・」

「俺は見返りが欲しくて戦ったんじゃない。俺が戦う理由はただ一つ。この空で泣いている人を笑顔にする為だ。」

王女様（？）に少しキツく言うと、後ろから美形の少年が歩いてきた

恐らく、この茶髪王女様の弟だろう。

「自己紹介が遅れました。僕はライ・フォン・シュフィールです。」

「わ、私はエレナ・フォン・シュフィールです！」

顔を赤くして俺に言ってきたのは噂のエレナ姫とやらだった。
しかし、何処の世界でも王子って美形って通ってるのね・・・なんだか複雑な気分だが納得。
すると、金髪美人さんも俺に向かい頭を下げてくれた

「私はこのシュフィール王国の騎士隊長。ティーンズ・アルファ・リーンです。」

「だから、俺は見返りを求めて戦ってなんかないって。頭も下げなくていいし。」

少しあたふたしながら答えた。
この国の女性は皆スタイルがいいのか？と思ってしまう位くっきりと分かるその豊満な胸。
騎士の服を着ているのに、なんと言う・・・・
おっと、口が滑った。
王女様も王女様だ。なんでそんな胸元を露出しているドレスを着るかねぇ・・・
いまいち理解ができん。

「あなたの実力を見込んでお願いがあります。」

・・・・まさか、このパターンは・・・・

「私と模擬戦をしてはくださいませんか？」

「だよねぇ・・・・だが断る！！！」

ティアさん（俺命名）は俺と模擬戦をしたいらしい。
まったく、どの世界に行っても戦いに巻き込まれる癖は直らないのかよ・・・
あのロリコン爺さん・・・今度会ったら確実にライダーキック喰らわせてやる・・・

『ふぇっくっしょい！！！！！・・・ずずっ・・・誰かわしの事を噂してくれる可愛い小学生の女の子が居るのかのぉ？』

所変わって中庭。
ティアさんは俺とどうしても模擬戦をしたいらしい。
さっきから俺にそればっかりだ。

「ですからカズヤ殿！私と模擬戦をしてください！！」

「・・・・・・」

こういうのは無視するのが得策。

おまけにいい加減付いて来るのをやめて欲しい・・・
ほら、復興作業をしている騎士さん達がこっち見てますよー？

「・・・しょうがありませんね・・・受け入れてくれないのなら・・・」

すると、ティアさんは懐の剣(レイピア)を掴み、俺に襲い掛かってきた！
まぁ、そーゆーのは軽ーく避けてっと・・・

「たあッ！！！」

なんだと！？
まだ突いてくるのか！？

「くうっ！！！！」

とっさに近くにあった木の棒で応戦した
勿論、ちょっとした細工で普通の木の棒よりも硬くしております。

「な、なんだと！？」

「・・・先に仕掛けてきたのはそっちですよ。もう、知りませんからね！！！」

すると、右手に持っている木の棒に力を送り込むと、クウガ・ドラゴンフォーム専用の武器
ドラゴン・ロッドへと姿を変えた！
それと同時に、俺の髪の色が青く染まった

「っ！？／／／／／／」

俺の身体に存在する「アークル」は物体を変化し、己の武器として戦うというシンプルな特性を持っている。
それに、イレギュラーとなる「オルタリング」が俺の中に存在する為、なんでかは知らないが、アークルを取り出さなくても、木の棒等を武器に変えることが出来るのだ！
その代わり、髪の色が変わるんだけどな。
さて、なぜか顔を真っ赤にしているティアさん、反撃させていただきますよ！

それは、一瞬の出来事だった
一瞬で目の前に到達した俺は、彼女が気づく前に、彼女の武器を弾き、ドラゴン・ロッドを彼女の首の前で寸止めした。

アークルの能力で、攻撃力を捨てる代わりに、スピードに特化したドラゴンフォームの成せる業である。
ちなみに、アギトの力も使えるぜ！
勿論、一時的にベルトを取り出さなくちゃいけないが、フレイムソード、ストームハルバードを自由に取り出せるのだ。
ちなみに、アギトの力とクウガの力をあわせて使うこともできるが、ひどく疲れるから今はやめておく。

「これで理解できたか？俺と、アンタの力の差を。」

ティアさんは、その場で膝を着き、俺に負けを宣言してくれた。
しかし、この時、俺は気づいてしまった。
俺は彼女の誇り、そしてプライドに大きな傷をつけてしまったのだ。

「ティアー。カズヤも！早く玉座の間に来てよー！！」

遠くからエレナさんの声が聞こえた

ティアさんはどうやら、自分の弱さを悔やんでいる様だ・・・

すると、俺は彼女の横に座り、ゆっくりと言った

「・・・言っておくけど、俺は最初から強かった訳じゃないぞ。俺は・・・アンタみたいなプライドは持ってないし、誇りも無い。でも、一ついえるのは・・・負けは決して悪い事じゃないんだ。俺だって数え切れないほど負けたさ。でも、それを乗り越えて今の俺が居るんだ」

「・・・・強いんだな・・・カズヤ殿は・・・」

「「殿」はもういいよ。俺はアンタより身分なんて物はないよ。」

「し、しかし！？」

すると、俺は彼女に向かい言った

「俺の事はカズヤって呼んでよ。俺もティアって呼ぶから。いつまでもアンタじゃ失礼だし。」

「・・・・分かりました。カズヤ・・・／／／／」

こうして、少しだけ遅刻した俺達はレイナに尋問を受け、なんとか

解放されたのだが、いつまでたってもティアの顔が赤いのは何故だろう？

## 第三話　炎の戦士、ここに推参！（後書き）

次回予告！！！

魔物を退治したカズヤは自分の居る場所を教えてもらい、そして次の日から旅をすることに！
しかし、そんなカズヤに恋心を抱いたティアは・・・？

次回

「三国地図。新たなる旅の始まり」

正義を貫き！自分を見つけ出せ！！

## 第四話　三国地図。新たなる旅の始まり

カズヤ達が遅刻で席に参加した後、玉座の間では地図が広げられていた
カズヤは天から遣わされた男だと知り、ライは地図を広げ、国の位置、文字の書き方などを教えた
だが、カズヤは何故かこの世界の文字を読むことができ、ただ読み書きができればいいらしい。

そして、地図に大きく緑色の領土を広げている国、大地が盛んで大きな国、海に面した位置に存在する大きな国。この国がどこなのかと言うと、緑色の国の首都とも言える場所だった。

この国はシュフィール国。緑の囲まれた美しき自然の街だそうだ。
しかし、この首都以外のほぼ7割は自然だとか・・・

そして、シュフィールから斜め右下の国が、大地の国ダイン国。
斜め左下が海に面した国、シュヴァーン国。

シュフィールは自然中心から少し上にずれた辺りらしい。
昔は近くにエルフの住む村があったらしいが、昔、エルフ狩りが行われ、エルフはどこかへ行ってしまったと言う・・・
エルフは人間よりも優れた戦闘能力があり、魔力も高い。
その為、昔の人はそれを脅威だと思い、消そうとしたらしい。
まったく。なんて身勝手な行動だ・・・
エルフの男は労働を強いられ、女は奴隷として生かされていたが、エルフの人口は半分以下になってしまったとか・・・

今では、ダインの外れで暮らしているらしい。

ちなみに、エルフ狩りをやめさせようと、シュヴァーン国家に使いを送ると、使いの生首を送られ、シュヴァーンと戦争が起きたとか・・・

結果、ダインと同盟を結んだシュフィール連合軍が勝ったらしい。
ダインはエルフを保護し、自由を与えてくれたのだ。
今でもエルフはシュフィールに里帰りしてくるとか・・・

「そうか・・・そんな事があったんだな。」

「はい。だけど、もう二度と戦争のない世界にするには、まだまだ努力が必要ですがね・・・」

「戦争はなくなっても、人は争うからな。だが、争いがなくなった世界は心の無い世界と同じだがな。」

カズヤは少しキツめに言い、ライを困らせた
勿論、ティアに脅しを掛けられ、ゆっくりと引いたのだが。

「なるほど。大体分かった。用は俺が旅して、魔物を片付けりゃいいんだろ？」

カズヤは立ち上がり、言った
すると、レイナが言った

「た、旅って・・・もう行っちゃうんですか！？」

「まぁな。膳は急げってね。」

「まぁまぁ、待ちなさい。」

すると、この国の王「ケルディム・フォン・シュフィール」さんが俺に言った

「さすがに早すぎる。今夜はこの城で過ごしなされ。」

「い、いや・・・俺はこの城に住むにはなんか場違いな気が・・・」

「そう言いなさるな。ティアや、カズヤ殿を部屋にお連れしてやりなさい。」

すると、ティアが俺の腕を掴んできた!!

「さぁ、こちらへ・・・」

「ティアさん。連れて行かれるのはいいけど、なんで手に力を込めるのかな?すっごく痛いんだけど・・・」

「いえ、お気になさらず・・・」

普通気にするって!!!

そして、俺はティアに案内された部屋へ向かい、鍵を開けてくれた・・・・やっぱり、この城は俺にとって場違いな気がする!!!

なんだよこの広さ!?おまけにベッドもデカッ!?

「それでは。私はこれで・・・」

ティアは静かにドアを閉め、どこかへ行ってしまった！
まぁ、眠ぃしいいや。

ベッドに乗ると、案の定柔らかい弾力が俺を心地のいい気分にさせてくれた！！！
よし、寝よう。

そういい、俺は眠りについた・・・・

「姐さん、本当にいいの？」

玉座の間ではレイナが清楚な服を着て、ただ正座で座っていた。
ライは少し悲しそうな顔でレイナを見る

「いいのよ。私はあの人と一緒に旅がしたい・・・だから、これは私の覚悟の証。」

そういい、前にある投げナイフに手を掛けた
そして、髪を掴み、ゆっくりと刃を向けた・・・

彼女は王座を放棄したのだ。
その証に髪を切った・・・
ただ、一人の男を愛してしまったから・・・

「これにて、レイナ・フォン・シュフィールは王座を放棄します。」
「・・・分かった。それでは、カズヤ殿と共にこの世界を旅しなさい・・・ティアよ、レイナを守っておくれよ。」
ケルディムはレイナの王座の放棄を悲しみながら、ティアに頼んだ。
すると、ティアは静かに言った
「分かりました。・・・しかし、カズヤを渡すわけにはいきません。」
すると、周りに居た騎士達も驚いた。
勿論、レイナ達も含めて
「ほう・・・カズヤ殿も罪作りな男じゃのぉ・・・」
笑いながらケルディムは言った
すると、レイナとティアは対峙し、お互いに手を差し伸べ、握手をした
「これからは、敵同士(ライバル)だね。ティア」
「レイナさま・・・いえ、レイナ。カズヤを譲る気はありませんよ。全力でお相手をさせていただきます。」
すると、二人の手がぷるぷると震えていた。
案の定、二人は力を込めて握手をしていた
「えぇ。それは私も同じです！」

「それは嬉しいですね！！」

だんだん険悪な雰囲気になるも、ライが必死に説得した為、二人は玉座の間を後にした

そして、次の日。

「・・・ホントにレイナ？」

カズヤは目の前に居るレイナに驚いていた。
髪の毛が短くなるだけでこれほどイメージが変わるとは・・・
正直、かなり驚いている。

「はい。」

「ホントにいいのか？王座なんて放棄して。」

「えぇ。私はカズヤと一緒に居たいから。」

「・・・・それは、どーゆー意味で？」

「そのままの意味。私は生涯をカズヤと共に過ごします。」

いきなりのプロポーズに驚くカズヤだが、そこに隣に居たティアが止めに入った

「レイナ！！いきなり何を！？」

「え？昨日言ったでしょ？全力で相手するって。」

「な！？・・・カズヤ！！！私はお前の事が好きだ！！！私と結婚してくれ！！！！／／／／」

こちらもいきなりの大胆告白。
ちなみに、城下町を出ているので誰も居ません。
いやー。良かった良かった・・・
って、良くねぇーーーー！！！！！！！！

「え！？ちょ！？何！？なんでいきなり告白！？ってか、ティア！！結婚ってなんで！？どういう風の吹き回し！？」

「うるさい！！！さぁ決めろ！！！」

「どっちが好きなの！！！カズヤ！！！」

そこには歴戦の戦いを戦い抜いたカズヤでさえても足も出ない阿修羅が二人・・・
これを修羅場というのである。

「えっと・・・その・・・俺は、まだ二人がどんな人か知らないし・・・だから、この件は保留って事で・・・・」

「む・・・」

「あ・・・そうだったね・・・」

ティアは少し驚き、レイナは静かに手をぽんと叩き言った

「分かった！！それじゃ、お互いを知る為に・・・・」

「それ以上はストーーーーップ！！！！危ない発言は控えましょう！！！！」

「カズヤ！！！これから二人きりで水浴びでもしないか！！！！？／／／」

「ティアもそういう発言は控えてぇえええええええええ！！！！」

こうして、三人は旅立つのであったが、とてもじゃないが、いい幸先ではないらしい。
彼等を静かに見守るとしよう・・・

## 第五話　大地の戦士

二人から熱烈なアプローチを繰り返され、カズヤは途方にくれていた

（はぁ・・・先が思いやられる・・・）

そう思いながらも、二人の美人に告白されているのが若干嬉しいらしく、だが、その熱烈なアプローチに呆れながらも小さな街「エアール」に向かっていた、シュフィール国から少し離れたこの街は、風の街と言われ、風と共に幸運が運ばれるという。

「それにしても、お姫様って、我が儘じゃないんだな。てっきり、疲れたとか言って立ち止まるかと思ってた」

「カズヤ、私を甘く見ないでね？確かに私には、ティアほどの技量はないけど、毎日ティアと一緒に騎士の修行してたんだぞ？普通の人より体力がある自身はあるぞ？」

すると、レイナは自身の豊満な胸を張りながら俺に言ってきた。うーむ、この人は最初は女性らしく振舞うが、親しくなると少し男っぽくなるんだなと思いつつもティアへと話を向ける

「ティアはいつ頃からレイナの騎士を？」

「私は１４の時にあの城で騎士をしておりました。」

なんだと？１４と言ったら俺が始めてグロンギと戦った頃じゃないかそれから1年後にダグバと戦って・・・その前にあかつき号でアギ

トの能力に目覚めて・・・
結局、ダグバを倒したはいいけど、アークルが再生するの為に1年間クウガになれなくて・・・
その途中でアンノウンと戦ったのだ。
警視庁の開発したG－3システムには驚いたなー。
だが、これは大体の話だから、正確な話をすると面倒なので、今はここまで。

「あっ、見えましたよ。風の街エアールが」
すると、森を抜けたところには、沢山の丘があり、心地よい風と共に人達が活気溢れる生活をしていた
ここが・・・エアール・・・

「どう？どう？綺麗な街でしょー？」

「なんていうか・・・言葉にならない。」

この街の丘には民家があり、それでもまだまだ丘は余っており、中央には人達が集まる大きな商店街（？）みたいな物が沢山ある・・・
いいなぁ・・・こんな場所に住みたいというのが男の浪漫というか・・・
よく見ると、家の前に二本の棒を立て、ハンモックに揺られながら眠っている人達が見える
現在、太陽は少し傾いているから・・・大体3時位か。

「さて、宿を探しましょう。」

「宿って・・・金は？」

「私のお財布はティアが持ってるよー。私無駄遣いしちゃうから」

ほほう。レイナの財布の紐はティアが握っていると。
一様この二人の信頼性が分かった気がした。

「それに、ここはシュフィール王国の領土内ですよ？」

そういい、なにやら手形を取り出した・・・
って、手形ぁ！？

「え！？それって、王様の！？」

書かれている内容は「天の遣い、カズヤ殿はデュナミス・フォン・シュフィールの名の元にあらゆる交通手段、そして、宿の代金等は・・・・」

これを見た瞬間、デュナミス王を正直ぶん殴りたくなりました。
俺は下町の様な場所で育った為、こういう王族やら、貴族やらのうんぬんが嫌いなのである。
昔は、王様なんて消え失せればいい等と考えていたため、童話等の話にケチをつけていた記憶が・・・

「あー、俺そういう奴嫌なんだよなぁ・・・面倒だし・・・」

「しかし、これがなければ、ダインや、シュヴァーンには入れませ

んよ？入るにはちゃんとした手続きが必要ですから。」

・・・・・やっぱ、いいや。
もうどうにでもなってくれ・・・

俺達は宿を狩り、一息ついている・・・

「だから、私はカズヤと同じ部屋！！」

「いいえ、私です！！！」

訳がなかった
二人は俺の部屋と一緒になりたくて喧嘩を勃発させていた。
あーあ、このままじゃ武器取り出してもおかしくないな。

「二人とも、他の皆さんに迷惑だ。俺は一人部屋を借りるから。じゃね～」

すると、後ろから批判の声が聞こえるが、話をつけてこの宿の一人部屋を借りた。

やっぱり一人の時が落ち着く・・・

「ふぅ」と息を吐くと、窓から街を覗いた
本当に活気溢れてるなぁ・・・
そう思いながらもゆっくりと見ていく。
子供達が愉快に遊んでいる・・・
この笑顔の為に俺は戦ってるんだな・・・

「キャアアアアアアアアアア！！！！！」

すると、案の定街の外から肉眼で確認できるほどのデッカイ魔物が現れていた！
大きな角、そして鎧の様な鱗に覆われている・・・
まるでサイである。
動きは割りと鈍重、しかし、走り出したら止まらなそうだ・・・

「俺につかの間の急速も与えないって訳か！！！」

俺は窓を飛び出し、近くにあった棒を掴んだ。
棒は幾つも枝分かれしている・・・
これなら十分だな。

すると、俺の髪の色が緑色へと変化した
それと同時に棒も形状を変え、クウガ・ペガサスフォーム専用武器
「ペガサスボウガン」へと姿を変えた

すると、サイがこちらに向かい走り出してきた
あの巨体から繰り出される攻撃にこの村はすぐに壊滅してもおかし

くないだろう
すると、サイの横から雑魚がうじゃうじゃと現れ、こちらへ向かってきている

「「カズヤ！！！」」

すると、後ろから二人が俺を見つけてくれた
案の定髪の色が変わっているので、赤面してくれるのは嬉しいが、後にしてくれ！
これは結構体力使うんだ！！！

「二人は雑魚の相手してくれ！！あいつ等全部下級の魔物だから余裕で相手できると思う！！！じゃあな！信用してるぞ！！！」

すると、俺はこちらへ向かって走ってくるサイにボウガンを向けただが、サイの方から子供達の泣き声が聞こえてきた・・・
まさか・・・

『怖いよぉー・・・おかあさぁん』

『助けてよぉ・・・』

さっき遊んでいた6人の子供達が泣き出している
くそっ、泣くな！！

「えぇい！！！」

ボウガンの銃口を雑魚に向け、何発も連射し、爆発させていくが、
問題はあの子達だ
このままだと踏み潰される・・・
ピーーーーーーーーーッ!!!!!
俺の口笛が当たり一帯に木霊した
すると、遠くから黒く、大きなクワガタ虫がサイに攻撃を始めた
あれはゴウラム。
俺の相棒だ。
さて、とっとと助けるか!!!

「こわいよぉ・・・・」

『キシャアアアア!!!!』

「きゃあああああああああ!!!!!」

下級モンスターが少年たちを囲んでいた
その中の一匹が少年たちに襲い掛かり、それと同時に他のモンスターも襲い掛かった
しかし、なぜか、襲ってこない・・・
なぜ・・・・?

すると、少年たちを守るように、一人の男が少年たちの前に立っていた

その姿はとても勇ましく、誇り高く見えた

すると、青年は少年達に目線を合わせ、言った

「泣くな。男だろ？笑おうぜ？」

そういい、静かに立ち上がった

そして、右下に両手を構え、それを大きく広げた

すると、金色のベルト「オルタリング」が現れ、待機音が鳴り響いた

そして、ゆっくりと左腕を前に出し言った

「変身！！！！」

そして、ボタンを押し、変身した・・・

その姿は金色の鎧を身にまとった戦士、そして、クウガによく似た

戦士・・・

アギトだった・・・・

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4623i/

---

異世界に降り立つ最強の男

2010年10月15日22時01分発行